

〔論 説〕

社会交変換論Ⅶ

—マーケティング・アズ・コンステレーションの焦点—

長谷川 博

はじめに

「人文—自然科学」₂において「単純—複雑」₂の C_1 への安住（デュエリング）は、ある所与の前提下での対称性を破る選択だけとなるか小田原評定となり、解釈の押し付けに余儀なく定義された問題の解決過程をとらないことによるイノベーションの可能性を封じ込む。ゆえに、そうした前提が利かなくなる複雑系へと、「苦 [痛] あれば [快] 楽あり 2.0」を迎え撃つ色んな心をもつ強い HI (人間 [身体] 知) なる者が増えている。昨今のように輪をかけ強い AI (人工 [身体] 知) 化が云々される以降では、本論の基礎的主題であるトランスベクション（サプライ・チェーン）という複雑系での取引（トランザクション・トレード）のクロス・カップリング（CC）ばかりについてははなかりながらうが、ダブル・クロス（DC）における C_1 と C_2 の CC を、強い AI が処理しだすかもしれないとの論調もでるのだろうか。とまれ周知のように、全知全能（SEU）モデルや限定（制限）合理性行動モデルと情動が働く直観モデルに対し、理性の欠陥は自然選択というより容赦ない合理性により正されるという進化論的適応のデファクトスタンダード・モデルといえる行為に先立つ意思決定論⁽¹⁾があった。しかしながらこれに対しては、理由により合理的に説明できる「行為」一本論は行為を「行動—活動」／「意思決定—実行」／「管理—課業」の3次元で考えている—を突き詰めた言及⁽²⁾がある。また、 C_2 から C_1 への分化をいうだけの始末や C_1 (C_2) によって説明できない C_2 (C_1) を虚構（妄）だといひ否定する始末⁽³⁾がある。虚構が動き出しているというときに、「飛び越した者は飛び越さず、飛び越さぬ者が飛び越している」ということをどこまで自戒できているのかと思う。

まずはそこで、量子が「参入—脱参入—再参入する」粒子でも「引けば寄せる」波でもあるとのように、それ以上でも以下でもない粒子的な C_1 と波的な C_2 の CC では、つぎの行方とともに本論はグラウンドを責めて10年がかりで後もう一周はすると考えながら走っている。それは、自動的存在すなわち元（区分上ではカテゴリ）は1でも多でもないという批判実在論からすれば、既存テーゼ（[新] 実在論, [新] 唯物論, [新] 自然主義等）の包摂に向かうかと括目できる論争⁽⁴⁾である。

(1) Simon, H.A., 1983.

(2) Dretske, F., 1988. 以上は、以下のデイヴィッドソンによる自然化路線の向きから SOL 化に踏み出していたと見做す。D. デイヴィッドソン／服部裕幸・柴田正良訳, 1990 (1980)。

(3) M. ミンスキー／安西祐一郎訳, 1990 (1985) 年。たとえば以上での FOL 的な容赦なき切り捨てへの、臆面ない追従は既に鳴りを静めた。

(4) Giere, R.D., 2006. Chakravartty, A., 2007.

また、「マルクスがマルクスになった」と言われている労働観⁽⁵⁾の頷木を何ほど離れたのかも、「肯定₂—否定₂」である。むろん、昨今でものファースト化により相同性を求めることは断じて異なるが、餌撒きではなく種蒔きとして「肯定₂—否定₂」を言うことでしか、「結び(ひ)」という生む(発生)力はでてこない。「AよりもB(非なる別Aか反A)である」という肯定に対しては、「BよりもAである」が内的否定、「AよりもBではない」が外的否定といわれる⁽⁶⁾。現実のままあるこの外的否定がただの餌撒きになっているだけの場合は、本論では論外である。そうして、「私が私になった」と純粋なまでにいうほどの「われ(HI)われ(HI)」は相互撤退し合うがそれぞれに新しい朝の目覚めには遠く、誰かを何かを探す憂き目にあうつぎの2種に分かれる⁽⁷⁾。①新しい集合論としての論理階型論の構築を見たまで⁽⁸⁾のように、自己言及を許容するループ(「環」)を忌避する者(C₁者)。そして②直観主義に終始するところの反実在論者だけではないのだが、上記①はいかに直観—自然科学者が超越に向かうのも「人間らしさ」の極みとされてきた直観ではないか—に合わないとし「ループこそが私だ」という者(C₂者)。基本開閉論にかかわるその「多重再帰性」ループについては、学習(自己組織性)論におけるシングルからダブルさらにマルチ・ループ⁽⁹⁾では「FB₂—FF₂」においてエンタングル(もつれ)情報があると判断するが、どうであろうと層間にもSOLがあるので、線形分離可能な場合へと主知論(知決定論)化する認識論の工学化でも線形分離不可能な場合が視野に入れられてきた⁽¹⁰⁾。

よって本稿では、以上を熟しつつ次稿以降を理論的により入念にいうためにも、専門的にはマーケティング・アズ・コンステレーションの見地から全体とはトランスベクション機構(流通機構)だと念頭し、一事が万事に通じるような現実(「過去₂—未来₂」/「経験₂—超越₂」)の探求として焦点を絞る。そして、たとえ未だ互いに互いの名実を知らぬ(知りえぬ)者であろうとも、「[超]組織個体/[間]世代的」に「これでもう十分だろう」と人間が言うこと為すことに、以下の節を跨ぎ記す(1)～(9)を少なくとも鈍らず経るCCがあればいいとまでをいう。

第1節 ネオ共進化と発生論的共生：2重偶有性以後の2重様相性

パラドクスの帰結である矛盾には、様相的につぎがある⁽¹¹⁾。①論理的にすべてが演繹できてしまうという破綻(「偽→真」)を必然的に来し、不可能である矛盾。②既述の「嘘つ

(5) K. マルクス/城家登・田中吉六訳, 1964年, 84~106頁。

(6) N. チョムスキー/福井直樹・辻子美保子訳, 2011年。

(7) D.R. ホフスタッター/片桐恭弘ほか訳, 2018(2007)年, 82~97頁。以上に基づく。

(8) A.N. ホワイトヘッド・B. ラッセル/岡本賢吾ほか訳, 1988年, 127~275頁。B. ラッセル/高村夏輝訳, 2007年, 156~185頁。なお、筆者が推し測るまでの以下も参看されたい。K. ゲーデル/林晋・八杉満利子訳(解説), 2006年, 110~117頁, 189~196頁。K. ゲーデル/戸田山和久訳, 1995年, 57~95頁。W.V.O. クワイン/飯田隆訳, 1992年, 119~155頁。L. ウィトゲンシュタイン/野矢茂樹訳, 2003年, 31~128頁, 151~180頁。S.A. クリプキ/八木沢敬・野家啓一訳, 1985年, 25~237頁。R. ローティ/野家啓一監訳・伊藤春樹ほか訳, 1993年。

(9) Argyris, C., 1992, p. 68. 以上はFBの遡及先によるループの区分を、以下は脱学習でもある学習の学習(deutero learning)をいう。Redding, J.C. and R.F. Catalanello, 1994. これら以前にもある管理過程(戦略過程)論でもしかりとは、2次化の含意度合いでいう。

(10) 甘利俊一, 2008(1989)年。多層の学習回路網等については以上がある。

(11) 一ノ瀬正樹, 2006年。M. カオンゾ/高橋昌一郎監訳, 2019年。金子邦彦, 2019年。以上を踏まえて尚もいう。

きのパラドクス」など現実にはまずもって生じえないとはいえ、純然に論理上のアポリアである矛盾。そして③数学など科学が進展するほどに上記①や②だとはいえないと、その真偽への含意に諸論で濃淡がでているのだが、現実はその意味を語りうるので実践問題での多様な意義と偶有的に結びついているところの、不可能ではない矛盾。ただし、[量子]情報科学が「操作的記述」(推論の各段階がすべて実験的に検証可能な記述)は2者以上の対話で進められていくのであり「私」だけではない⁽¹²⁾ということも踏まえて上記③に照射することが、2重偶有性以後(ポスト・ダブルコンティンジェンシー)の「2重様相性」の道筋になると考えるわけである。その上記③については、「アズ(as)」という一語に込められている例えばつぎがある。①成長神話が崩壊して、尚も成長過程をものにしようとしていること。②「反極の一致」への対処でも再燃し続けてきた「A=非A」という魔等式が投げかける問いを晴らせるかということ。③前稿で述べたばかりの「ニューカム・パラドクス」と資本主義の捉え方。そして④「ある観点では異なることを認めつついま論ずる点では差(違い)がないという意の『等しい』—[今考えている限りでは]あらゆる点で等しいという意の『同じ(ちがいが無い)』」/前稿既述の「メレオロジー—メログラフィー」における「手前(デコヒーレンス)—手許性(コヒーレンス)」についての考察を要すること。

また、ここに戻るつもりはないが、われわれがデカルトを超出できてはいない行為中で保持され続け「真実」になる2(多)元論⁽¹³⁾も、われわれがゲートを超出できてはいない行為中で例えば「個体発生は系統発生を繰り返す」という生物学的進化の前成説が保持され「真実」になる1元論も見かけに過ぎない幻想だといわれて久しい。マーケティングのバージョンアップ論では、C₂をも含意するようになることがあるとともに、「概念拡張—縮小」の閾値では実在把握上のドミナント化論になる。そこで、後述するSOL的な3層化を経る際にも当てはまるが、つぎのことから、どの操作を行うのかとなる。①「認識論的境界—存在論的穴」₂/「境界を顕わにする錠前(lock)—その穴をこじ開ける鍵(key)」₂に跨って変わる研究方法。②デジタル化により拍車がかかる「テキスト—コンテキスト(文脈)」のハイパー化(「/」によって付加できるバイナリ・コードが増えていくこと)。ここからの操作としては、つぎの①や②に対し言われてきた③の構築に連なっていく。①際立ってみえる一方の事物を前面化し、どうしてもよくみえる他方の事物を捨象する「在一不在」型のモデル。②一方を前面化するものの、他方を背面化する「在一暗在」型のモデル。そして③上記②における「在一暗在」を逆転してみせるのではなく、双方を同時前面化しそれらの対照(二対立)からの飛躍を何とか記述しようとするモデル。本論は、その③に向かうことをよしとしている。というからには、「推論(必然的結論を導くデダクション/偶有的結論を導くインダクション)—直観(新しい状況下でよく知っている要素の認知から生じる瞬間的判断⁽¹⁴⁾)」₂を言っていくのであるから、偏に、推論主義に辿り着く⁽¹⁵⁾こともなければ直観主義に辿り着く⁽¹⁶⁾こともない。

(12) 細谷暁夫, 2019年, 99~121, 127~128, 301~304頁。以上に基づく。

(13) J. モノー著, 渡辺格・村上光彦訳, [1972], 185頁。Ford, J.D. and R.W. Backoff, 1988, pp. 90-93. 以上では、行為者の現実構築の仕方を表すあらゆる2元性が、4形態に区分されている。

(14) Kahneman, D., 2003, p. 1450.

(15) R. ブランダム/斎藤浩文訳, 2016(2000)年。

さて第1に、標準進化論モデルや行動ないし心理過程への生物心理社会的モデル⁽¹⁷⁾では文化と遺伝子などの特性が変項化されてきたが、従前の共進化論ではつぎの諸点が強調された⁽¹⁸⁾。①すべての進化が共進化であるように、すべての発生は共発生である。②例外現象と見做されていた共生関係が、実は一般法則なのではないか——とすれば、社会科学というFOL上にある従前のALT(オルタナティブ)共生だけが、ここでいう共生の例化だとはいえないかろうとの問いを発することになる——。③環境シグナルの産物である多相現象(不連続的変異)は環境との相関を、共発生は発生中の項(構成素)間の接触(連続的変異)を必要とする——とすれば、「内的—外的」/「変異—選択」/「連続—不連続」にあたる永遠は、「相関—接触」という事実真理認識をハードル化させているとして問いを問うことになる——。④ときには産(コ工)業的に誘導される、異常な表現型の誘導に対するカナライゼーション(表現型の防御機構としての固定化的方向付け)は、それぞれの因子間の共認的な相互作用を示す。そして⑤組織場仮説が示すように、構成素間の抑制的な相互作用が崩壊していくと、情報修復機能がくずれた構成素の増殖傾向を分裂的に来すこと(組織の病理)に対するエピジェネティックス⁽¹⁹⁾がある。

これに対し、標準進化論以後といえる3重継承モデル⁽²⁰⁾以後のモデル⁽²¹⁾は、[共]発生と[共]進化のリンクとして「超生命体」における文化駆動の遺伝子進化を強調して、組織、戦略(政策)そして制度の見方を「より実在論的に——筆者加筆——」変え、さらには生理や心理や競争そして歴史に跨っていき研究方法が変わるだろうという。すでに遺伝子グループは、ライフ・スタイル分類にも用いられてきたので文化と無縁ではなかった。この段階では今にも、[共]発生と[共]進化のリンクとして相互駆動をみるので、「変異₂—選択₂—保持₂」にある特定のものの進化の歴史を辿ることに疑問符を付ける、進化論でも支持され始めている包被論と向き合う。さらには、遺伝子論(化学や物理学に還元されることもある生物学)と文化論が「人文₂—自然科学₂」になるほど、マーケティング—本論は2次的であるならばこの概念拡張論を許容する——を含む「商—経済—経営—政治—法律—文化—技術」(順不同)という機能的相互包摂関係がある「7変項[諸学]」のいずれにおいても、遺伝子と文化のネオ共進化をいうに足る段階にあるはずである。そして、社会科学は、以下の経緯からも留まるところを知らず、かつての社会進化論のパラダイム補強的な説明付加であるネオ(ニーオ)か代替的パラダイムであるニューかとの可能性が追究される。

往時の行動主義については、AIアプローチの賛美に繋がった認知科学革命直後に、心的モジュールといった基本的事実を捨象し暗黒時代の扉を開こうとしないとの批判が噴出する一時期があった。この間ににわかに乗じたともいわれるが、「暗闇で居ないかも知れない黒猫を探す」ようであり「厳密な境界を引こうとする」ようでもある本質主義⁽²²⁾

(16) 金子洋之, 2006年, xiii~xvi頁。以上ではSOLを排除する直観主義論理の公理系をいう。やはりどうも鮮明にはSOL化が汲み取れなくなっているが経営学での直近には以下がある。野中郁次郎・山口一郎, 2019年。

(17) Myers, D.G., 2013.

(18) S.F. ギルバート・D. イーベル/正木進三ほか訳, 2012年。

(19) N. キャリー/中山潤一訳, 2015(2015)年。前稿で既に述べたが、以上も参看されたい。

(20) 長谷川博, 2014年, 17~33頁。以上を参看されたい。

(21) Henrich, J., 2016.

——例化（インスタンス）間の差異を無視して概念拡張に利用できる帰納は、本質主義を誘導する——としては反証への免疫力が高いので、古典的情動理論が、モデル補強もあって一旦は復権し、未だ法にも経済にも企業にもそして一部の科学者においてすらも深く根づいているほどである。そのモデル補強は、何種類の情動があるのかを精緻化しようとした基本情動理論と、企業価値評価ランキング自体の認定を招いた評価理論という内部2流派による。後者の影響なのか、ドッグ・イヤールがいわれながらもドッグ・コンテスト紛いとなり、いつまでも「内一外」₂の内₁になれば批判を浴びるだけな内部留保を増加させているとすれば、資本主義精神に反しよう。その一方で、古典的情動理論へのさまざまな反証を提示したものの代替パラダイムを提示できなかったために見落とされ一掃された諸論者たちの50年間がその可能性を拓いていたのだが、反本質主義の「経験」構成主義が、反旗を翻しブームとなった。しかしながら、上記2論間の応酬三昧が社会的損失を招いてきたといい、目下の「脳」神経科学は、それらのどちらも認めてはいない。とはいえ未だに、それは「理論—実践」₂の間で伝わり難いことをいっているからだろうが、C₁的な2論を信じてきた多方面の者の経験をすぐさま変えさせるほどではない。それでも、目下の「脳」神経科学がつぎのようになっていることは⁽²³⁾、「ネオ—ニュー」／「共進化論—C₂論」を見据える上でいまやベター・プラクティスだと目す。①古典理論では自然、神、そして進化を、構成主義では環境、そして文化を、脳を形成し心を設計するたったひとつの上位の力だと想定している。②むろん、生物学的構造（コ「対立」遺伝子）か文化かだけではない。文化は脳の配線を導き、さらにその人の行為の態様が、次世代の人々の脳の配線に影響する。遺伝子は「物理／客観／主観」的な社会環境に応じて配線する能力を脳に付与する。③人類の適応で特筆すべきことに、脳の配線のためにあらゆる遺伝物質を受け渡す必要がないことが、生物的な節約を可能にしている。④その代わりに、他者の脳に囲まれた状況では、文化を通じて自分の脳を発達させる遺伝子をもっている。この脳が、類似性と差異性に基いて情報を圧縮し、冗長性を巧みに利用するように、複数の脳は、社会的冗長性を利用し配線し合う。そして⑤進化は文化を介してその効率を上げてきたのであり、また、私たちは、脳の配線を介して子孫に文化を受け渡しているということである。

そして第2に、言語的転回以後には、「言語依存—非言語依存」／「脳決定上での記憶—遺伝子決定上での記憶ともつかぬ記憶」の意味——ペット・ロスが分かる人間にはより理解されやすいだろう——でこそいべきと考える脱人間中心主義がある。そうして、共生概念については、「解釈—構造—現象主義」（HIにおける志向上の信憑化の3典型）／「好都合—不都合な真実」におけるシステムクス（「HI（コスキル）依存的組織₂—テクノロジー（コAI）依存的システム₂」）を再考し、SOL上の発生論的共生という実在も、いえばよかったのだと思ひ知る。というのは、伝統的な自然主義も反自然主義も誤りである⁽²⁴⁾といわれていたが、つぎのことから、アブダクションをより可能化する記号（サイン⁽²⁵⁾）彫琢になると考えるからである。①前稿既述の射程範囲にある「相関—接触主義」という区分は、さしもの文化4

(22) F. ダーウィン／浜中浜太郎訳、1931年。「種の起源」は反本質主義であったが、以上の書での記述が曲解され本質主義の錦の御旗になったといわれている。

(23) F.L. Barrett, 2018, pp. 152-174.

(24) R. Bhaskar, 2008, pp. 36-45.

類型上の裂け目に、「自然を対象とする科学技術主義をいかに翻すのかの自然主義一人為を対象とする科学技術主義をいかに翻すのかの文化主義」という区分を再参入させた。②同稿既述の生物学上の地表論は、その時点で見いだせる地理（層）学あってこそ物理化学に還元できることを強調した。そして③日本人は集団主義だといわれてきたことからの公序良俗にある陥穽批判になるのだが、日本人は日米比較でむしろ個人主義だという実験結果⁽²⁶⁾を包摂するにも、「単数₁—複数₂」へ誘った様相論⁽²⁷⁾を比較関係論的にも手繰り寄せる必要がある。

子供をお迎えに行く親が託児所の設けた制度にどう対応したかについての例化⁽²⁸⁾の引用件数が増すにつれ、つぎの思い込みはすべてが誤りだと考察されるようになった。それは、われわれは同じく捉えた世界を同じく望むので、世界の原因結果（決定論）モデルと理由成果（非決定論）モデルのいずれがいずれに「 \neg 」整合的なのかを追究しつつ、あらたな情報や体験を同じく受け止めるのだ、という思い込みのことである。それでも、思考とコミュニケーションに手許性がある操作手段である言語が手前性に転じることもあるとは棄えているので、実在はどうしてもいいという認識論者が存在論的にも考えるようになっているので実在を否定するわけではないとして、つぎの2点を整序しよう。①もしも私たちの表象する対象が私たちの表象から独立した自動的存在ならば（実在論）、それらは誤って表象されかねない（可謬主義）が、もしもそれらが表象に依存している他動的存在なのであれば（反実在論）、それらは誤って表象されることはない（不可謬主義）⁽²⁹⁾。②原因と理由の同一化説も非同化説も説明として部分的には正しいのだが、「客観—主観的」／「時間独立—依存的」／「自然—一人為的」／「外延（例化される出来事）—内包（それらの意味）的」といった区分が、「原因—理由」の「 \neg 」日常的にザックリと浮かび上がる区分になっている。

「原因結果—理由成果の世界」は共時的に同じく捉え望み得るとする判断を警戒する批判的実在論（ \square 科学実在論）者として、「経験（過去）—現実（現在）—超越（未来）」₂について「解釈学—構造論—現象学」₂の視座を、HI [化]の制限合理性限界に抗い要すると考える者も、「苦あれば楽あり 2.0」の類の行為者であるだろう。決定論的に否応なく問主（客）観化された世界表象メディアである制度化された共時的意味記号という鑄型（押し付けられた解釈）を学習過程で経験し、やがては主意論的にその解釈を再表象するという解釈学的なループは、HIにはどうやら避けがたい。ただし、経験は自己の相対的な変換——他者における変換との非対称性があるという意味では相対的に「過剰／過小」な変換——をなんらか伴うが、関係の物象化が錯視であるといわれるならば、還元的な分析的記述による断片化がすべてのものの在り方を表現したものであり他の在り方はないとするのも、妥当な範囲を超えればやはり強固な思い込みといわれる。しかしながら、「心—脳—身」の優位性問題について、自然科学寄りに「脳—DNA（ \square 遺伝子）」／「還元—創発」も考えると、つぎをいうことになる。①解釈学の視線だけが、〈自然〉ではない。よって、い

(25) 大家間に、サイン（シグナル、シンボル）、シグナル（アイコン、インデクス、シンボル）という区分もつれがあるので要注意。

(26) 山岸俊男、2002年、13～163頁。以上は、組織論的な均衡論にも影響する。

(27) D. ルイス／出口康夫監訳、2016（1986）年。

(28) Bowles, S., 2008, pp. 1605-1609.

(29) Guala, F., 2016, p. 151. 以上に基づく。

かんせん浮遊する能記として無意味化するほど、共時的意味を変える「脱（解体）構築⁽³⁰⁾」による新たな意味区分が再表象への要になる。そうするには、うまく説明できずにいた「経験—現実—超越」₂（「実体—非実体」／「実在—非実在」／「事実—信憑」）を再説明することになるので、構造論の視線そして現象学の視線⁽³¹⁾が、シンボルをヒューリスティクス化するHIのワーキング・メモリ——ワーキング・メモリこそが科学でいう創発だとされた⁽³²⁾——に入り込めば、意識領野における視線は2重化（2次元座標の視座化）ないし3重化（3次元座標の視座化）する。各視線は、つぎの区分から成り立っている（図6-1）。①解釈学的な還元（創発）の視線（I + II）、②構造論的な還元（創発）の視線（I + III）、そして③現象学的な還元（創発）の視線（I + IV）。取引行為者（消費者行動）論でも、AIアプローチから一旦は離れるといい⁽³³⁾、自己組織性論やネオ・サイバネティクスに援護された意識領野の探究には踏み入っている。行為と制度の4大説総合⁽³⁴⁾以後として、「再帰的なものに限られる狭義言語機能⁽³⁵⁾」からの志向性は、まずもって「解釈—構造—現象主義」₂が「個人—組織」₂のワーキング・メモリにどこまで可能無限に回復するのかに左右される。とことん語だけを処理（アルゴリズム化）するAIに動きがとれなくなる際に、その強さの本として意味の全体論が際立つ。

図6-1 意識領野における視線

	不可疑的	可疑的
可謬的	I	III
不可謬的	II	IV

- (1) 語が「統語／語用」されるうち「テキスト／コンテキスト」のハイパー化も来す言語には、シグナルの3区分である「アイコン—インデクス—シンボル」としての意味がある。特にシンボル「命題（言語上の内容）—非命題（非言語的[感覚の]モダリティ⁽³⁶⁾上の内容）」についていう意味の全体論の基本演算では、人間固有な狭義言語能力が傳く複雑系といえども「テレオロジー—テレオノミー」的な論理的単純化が、先ずは必要になる。そして、過去の徒な埋設（蒸発）とならぬよう、中立

(30) J. デリダ／丸山圭三郎訳、1984年、339～360頁。以上はデリダの井筒俊彦宛の書簡である。なお、ここでいう無からは、無と空には出自のちがいがあるといわれることを実感する。

(31) 世界の関係形式を客観化しようとする構造論の視線は、可謬的事実領野の世界観をもたらす。そうして一旦は客観化され表象化された可謬的事実領野の世界観（像）を判断中止（世界の実在性遮断）する現象学の視線は、再検証後の残余をこそ現象としてビルディング（志向性的な構成）することで「垂直／地層的」な自己（対自）を得るといふ。科学により「深耕／拡大」されてきた可謬的事実領野の内外には、共通了解が温存されない程度問題としての可疑的信憑領野があるという。可疑的信憑領野は、アクティング・フィールドに他ならない現象の内存在である時間内部・共時的な水平・地平的自己（即自）に源泉があり、可疑的信憑領野の現象における相互調停不能な信念対立（廃棄不可能なズレ）には、隠蔽され忘却されたままから徐々に見えてくる「射映（「脳科学的なミラー」／コンティンジェンシー（第2節の図6-4）」以後において、偏差・冗長性の縮小に自己訂正の余地がないは通常だからである。以下に基づく。河本英夫、2000年。竹田青嗣、2001年。

(32) 澤口俊之、2004年、822～824頁。以下では、より組織論的な言及がある。Lewis, 2003, pp. 587-604.

(33) 山岸俊男、2002年、165～209頁。以上では、色んな心の道具箱の中で錆びつく心があるといい、非AIアプローチ・モデルを提示した。

(34) 行為と構造の階層性における相対性に時間軸を導入するのだが、今は先を急ぎ別機会に詳論する。

(35) M.D. ハウザー・N. チョムスキー・W.T. フィッチ／長谷川太丞訳、2004年、871～877頁。

(36) 大津由紀雄、820～821頁。

的に残る能記（たとえば「特殊—一般」／「個別—普遍」）のコードを、内的併合⁽³⁷⁾から専門的内容として創造する。内的併合とは、ある要素 X とその外にある別の要素 Y を結合する外的併合に対して、ある要素 X とその内部にある要素 Y を取り出して結合することである。経営統合・超組織化論でいえば「支配／影響力」基準上の親子関係（ \square 実子 [も同然] に託された『承継』）では、さまざまな形態があるスピアウトに共通していることだが、内的併合により、転移先に相応しい情報をもっている要素の転移が行われると、転移先に相応しい形態変化がなされ、かつ不要な情報が削除されインタフェース条件⁽³⁸⁾が満たされる。理論や実践が可能無限にボーダレス化しようがしまいが、言語由来の「脳内—脳間」の操作機能であるコミュニケーション（ \square 思考上の相互作用）にある「 C_1 — C_2 」の中のわれわれをまたもや蜘蛛の子のように散らす能記情報には CC 敵性があり、たとえば「物質—生命—精神」や「環境—場所—場」のインタフェース条件を攪乱する。

ハイエクが既に定義した「コレクティビズム」が、2 様の C_1 者の相互作用的な実践への、互いの意に必ずしも添わずとも紛れもない救済になってきたことを否定できる者はいないだろう。とはいえ、非線形を放置して 2（多）項分布化してみせるしかないスペクトラム化には、所詮、かの絶対矛盾的自己同一（ポストモダンのいけば絶対矛盾的自己差異）というパラドクス受諾が皆無——これが分析麻痺なデマケーション、マーケティングでいうセグメンテーションでも同じこと——である。よって、そのコレクティビズムにおいてさえも、右往左往の 2 重拘束（ダブル・バインド）がなんとも普通に起きている現象として解消せず、さしたる進歩がなかったわけである。さように、「砂—砂山」（「極小化的なセグメント市場—極大化的なマス市場」）のどこからが「普遍一般—個別特殊」なのかと考えたならば、なぜ「砂／砂山」（市場）が見えなくなったのかへの言い訳程度の巧妙になる。ピラミッド化と逆ピラミッド化の反転にある例えば「給付—反対給付」／「嘘—誠」での盗人猛々しさにはどちらの誰もがうんざりしてきたであろうが、その先がなかったのもこれまたしかりである。よって、列記とした「表も裏もある」という狸人間や「表も裏もない」という狐人間、そして「いずれのいうことがあって（なくて）ない（ある）のか」という「狸／狐擬き人間」たちによる、仮面舞踏会よりはずっとましな化し合いから彼らのいずれが先に更に化けるのかだけを、ここぞとばかりにいうことはしない。

むしろ、その彼らはそれぞれに、どこに住まう。この言い当て方としての説明には、「個別—普遍」／「特殊—一般」について「实在論—反实在論寄り」の FOL として縷々追加されてきた説明がある。結局は少なくとも人間にはその SOL もあるので「過去（未来）の未来（過去）が過去（未来）」——現在を考えることはここに尽きる——なのであるが、とりわけ過去が未来を変えるバック・トゥ・ザ・フューチャーを考えるならば、つぎの 2 論が先駆である。まずは、内なる一般化された他者である客我と、それに反応し統一する取り扱うことができない固有としての主我という「自我の 2 重性」を唱え、それまでの主

(37) 中島平三、858～860 頁。

(38) Juarrero, A., 2002, pp. 131-150. 以上でいう FOL/SOL な文脈的制約はインタフェース条件にかかわり、後稿に影響する。

私の衝動説や残余説に代わる創発的内省説を導く主我客我論⁽³⁹⁾があった。そして、関係を措いては自己の実質というものがどこにも存立しないというその後の自己意識論の捉え方もあったが、以前稿での謂いを改めて能記化すれば「空なる自己 {絶対矛盾的自己同一(差異)} の一貫性」——空は「有₁—無₁」に前後する「有₂—無₂」——をいう点では等しかったのである。ただし、以上では、自己という事物を掴もうとして、記号(サイン)であることが背面化した関係の物象化がその思考作用に「固定化する過程」を追跡した。そのあまりに以上が残した後生への禍根だとまでは言わないが——少なくとも以上においては記号区分の SOL 化が留保されていたのであろうから——、以後には逆の「流動化する過程」の捨象や背面化が拡大していったわけである。

- (2) 本論だけでなく場[所]の言及へと拡張していくことだが、自我(とくに主我)という自己意識は、やるせぬかなの「過去—未来」誤認による不幸中の幸い(過去(未来)が未来(過去)を変えてもいい場合)もあろうが、こうしてある経路に発生(生成)的に依存する「垂直—水平」／「内的—外的関係」という相互作用の中での、「C₁—C₂」的な「自覚—対象意識」である。行為主体は、「極小—極大」のさまざまな現実レベルに存立しているため、そのレベルを貫いた存在でもあり、そのレベルに応じて異なる存在でもある。このことについては、時間展望的に餌撒きか種蒔きかが問われるが、公人か私人かを問わず民[草]の様相がつぎに現れているとより重視できる。①「不完備ルールのみ遵守—そのルール不完備性をむしろヘルプする「運用」上でままたる別遵守方」があること。商品売買取引以外の契約はすべて不完備だと言われたが、商取引契約もそうとは限らない。②「短期—中期—長期」という区分自体が、相互にライフサイクル・ステージを異にする「個人—組織—社会」間で「整合—不整合」であること。戦時の配給統制下の民や、旧知の SOHO 以後の近時のテレワークが絡む就業等の「時短—時長」下の民の様相は、上記の例化になる。③王様と奴隷の関係で言われてきた FOL 的反転に SOL 的關係が加味された上で、上記②の区分自体の齟齬上にある「雇用—被雇用労働」の双方について身体予算⁽⁴⁰⁾の超過縮減をいう制度改革に対しよりプロアクティブな労働契約。そして④「強い HI—弱い HI」／「強い AI—弱い AI」の 4 関係における「主体(主語)—客体(目的語)」関係——図 6-2 に「強—弱」を再参入している——で生じる[時流の]危惧。

「専門がないのでメビウス輪の先がない」という、気がかりな発言に出くわす対話録があった⁽⁴¹⁾。恐らくはとうに SOL(C₂)を分かっていたであろうに、何故そう発言したのか。マズローの欲求 5 段階説や学習 5 段階説⁽⁴²⁾に限らず、それ

図 6-2 「AI—HI」₂

	AI	HI
AI	AI ₁	AI ₂
HI	HI ₂	HI ₁

(39) G.H. ミード／船津衛・徳川直人編訳、1991 年(1913, 1922, 1924~25)年。1~14 頁。

(40) Barrett, F.L., 2018, pp. 56-83.

(41) 浅田彰、1985 年。なお以下は、ベイトソン、ラカン、マトゥラーナに言及がある。斎藤環、2001 年。

(42) G. ベイトソン／佐藤良明訳、2000 年。「学習 0~Ⅳ」をいう学習 5 段階説である。これに対し DC/CC を思う礎には、脚注 9 の Redding, J.C. and R.F. Catalanello の読み返しをお勧めする。

こそ専門上での高階型化への批判は絶えない。それでも、ネットワーク化している世界——「動態としてのシステムクス」にある「ランダム—カオス—コスモス（ \square 階層秩序が前面化したオーダー）₂」——の3層（後稿で詳論する「中立（メタ）—中間—作用レベル」）化でいえば、このどのレベルでの専門がないと敢えていったのか。大学の教育課程編成における人文科学についての考え方に波及するので直接言及する暇は当面ないが、理性とは「非科学—科学」の残余（本質ばかりではない全様相の黒猫）を汲み尽くす姿だとはいつておく。行論の筋に戻るが、ひとまずいえば、中立（メタ）レベルとは、いまにせよ「個別—普遍」₂／「特殊—一般」₂が「認識—存在論」₂／「人文—自然科学」₂において抽出されてきているところの、中立化する最上の形式カテゴリ⁽⁴³⁾という入力層である。中間レベルとは「プレモダン—モダン—ポストモダン」において、資本、経済、積極的自由、そして積極的民主に優越する「モノ—コト」は何かをいう中間層である。そして作用レベルとは、素材（質料）と設計図（形相）を一致させようとする出力層である。作用レベルよりも中立化していれば、中間レベルには分立する方がいいとされてきた「司—行—立」——ここでは敢えて商経的管理論の能記を離れて用いておくが——がある。しかしながら、その内実が作用レベルにおいて破れた7変項であるから、これらには機能的相互包摂関係があるわけである。

また、20数年前の商業学会全国大会（於大阪）を想起する。そこでは、適応度（フィットネス）⁽⁴⁴⁾をいう際に、「イナクトメント⁽⁴⁵⁾」とはマーケティングの高頻出命題である「適応—創造」のC₂だといひ伝えたかったのではないかと思える。ご同様ならば、他の高頻出命題（たとえば「競働—協働」, 「代替—補完」）についても、C₂があるとならなければむしろおかしい。このことが、「ナラティブ」（テラーの語りを継げるテラーがおらず、マクロ想起率が急激に下がる特定時点で再発掘されるのかとなる「史談」）化したこともあり⁽⁴⁶⁾、「理論₂—実践₂」としてマーケティング出力が心もとなくなると穿てる。

- (3) この3層をFOLで単純化し、いずれかのレベルを指弾する舌長な応えが横行すれば、互いの迷いの本が解明されなくなる。殊更に「中間／作用レベル」での専門では、上記の高階型化批判に呼応し文字通り穴をあけるように穿った事を言う善後策が、ナラティブ化し秘訣化してきた感が否めない。であるから、C₂への存在論的メタファーでいえば、筆者も既用した大家の諸メタファーもさりながら、植物でも動物でも菌類でもないとされている「粘菌」、あるいは近年発見され共通祖先とされ

(43) 認識論を排去しえないと譲歩すればカテゴリとはいっても「図式2—カテゴリ2」であり、つぎの諸カテゴリ仮説もカント（認識論）かアリストテレス（存在論）かの狭間にある。①パースの3カテゴリ説、②アームストロングの4カテゴリ説、③スミスの6カテゴリ説、④トマソンを踏まえた16カテゴリ説（これにはただし「空」がある）。⑤フッサール、⑥ラッセル（矛盾を来さないように高階型化の各階型に創発があるとするごとき決定論のうちの創発概念）、そして⑦上記⑤と⑥の応用であるBFO（ベーシック・フォーマル・オントロジー）。以下等を参看されたい。鈴木生郎ほか、2014年。ARP, R. and et al., 2015.

(44) Dawkins, R. 1982, pp. 179-194. 以上は、適応度の5概念（ \square 包括適応度）に言及した。

(45) Weich, K.E. 1997. 以上に基づくSOL化表象である。

(46) G. モンクほか編／国重浩一・バーナード紫訳、2008年。以上では、諸学問で伝わり切らない事も掘りあてるように、ナラティブ・セラピーが必要だという。

る原始生命体 CPR (candidate phyla radiation) のメタファーが重要な説得力になると考え、その解明に大いに期待する仕儀である。このように念頭して跨れば尚更に、こんなことが既存諸学区分での専門なのかとの思いが専門家間相互で益々と前面化するはずだ。ここまで来てもの井の中の蛙にしか、「充なる自己 {相対矛盾的自己同一 (差異)} の一貫性」のみを求め高階型化する旧態依然の反自然な空費はない。よって、見事に循環していく超学的な専門にこそは、「入力—中間—出力層」という「3層化区分」自体の SOL 化もある批判実在論的な包披論を経たところの CC (充なる自己の一貫性から空なる自己の一貫性へと、 C_1 における対称性でも C_2 における対称性でもなく C_1 と C_2 の対称性を破ること) が必要である。

というのは、不毛の上塗りも甚だしい対話では、「ユニバーサリズム→ディレンマ→2重拘束 (ダブル・バインド) → C_1 者 → CC ← C_2 者 ← 共重合 (コポリマライゼーション) ← パラドクス ← ニヒリズム」という流動化過程のどこかしらに、「原因—理由」₂ による断続を設けているからだ。焦眉に「グローバル—反グローバル」／「反離脱—離脱」がいわれるときでも、いつまでもそうに過ぎないのか。

包披論が批判実在論的に「相対矛盾—絶対矛盾」をいう件に無知な知 (否が応でも感染したうちの C_1 者か C_2 者の知) が出揃っても、「相対 (絶対) 主義こそが自らを絶対 (相対) 化しているので相対 (絶対) 化される」という論法を含む件 (第2節でいう図 6-4) への対峙に始まる CC の場にはならない。つぎの現象化は、CC の場ではないことのシグナルである。①双方がそれぞれに [徒に純粹にも] 真っ当に [本項冒頭で述べた内的否定からの] ユニバーサリズム ([外的否定からの] ニヒリズム) を追究した挙句の不都合な「自覚—対象意識」を秘めた「隠れニヒリスト」(「隠れユニバーサリスト」) たちの捨象や背面化が放置されている。②一方は「さしたる進歩がないのは、ネオというよりニューといえる創発がない C_1 では、結局どう転んだかでしかないからだ」、他方は「 C_2 では、その科学的真偽を質すのに C_1 以上に宗教 (信仰) や民主主義 (Cイデオロギー) に委ねることになるのではないか」、といひ合うだけになっている。③上記①と②にも起因するが、「国家独占資本—資本独占国家」の同時前面化——これらを見ずから禁句にするのも後述する「内陸化に寛容」な、「憐れまれる弱い個」だといわれた現存在になる——や、なおかつ日本的には主権 (空) と権力 (有) と権威 (無) の区分があるとわかっている者が、増えて来ない。④ C_2 が分かったとした上でも、既存の派生的 [コミュニケーション・] メディア (コ7変項上の「理論—実践」₂ における「直系—傍系的専門機関」) 区分において、「空なる自己の一貫性という感概を CC 的に率先垂範するのは政治だ、という矛先の偏な定め方自体が無理矢理なのだ」と感懐する批判実在論的な包披論者が、増えて来ない。つまり、有部に破れた権力としての「司法—行政—立法」という3項分立的な能記公然化の「意図せざる結果」のうちにある悪影響としての「中国語の部屋」化が何もなかったかのようにあったが、実はあるではないかとなって来ない。そして⑤ C_1 的なアクセリングとブレーキングや、それらの C_2 的なクラッチングに未熟達な生兵法が減って来ない。このクラッチングは、近年では既述 (2) ④の4関係での AI 絡みな危惧に対峙するようだが、創発 (還元) 困難性を前面化すればシステム (組織) 化になるということなのであり、「販売のためのマーケティングが販売無用化に向かう」と言われてきたことの現実として販売組織の

内部 (外部) の内部 (外部) が外部 (内部) であることを想起する。

- (4) さまざまに「反省」(2項ディレンマ上でのリフレクティビティ, リフレクション)する C_1 者は何処にでも存在する。一方で, そこに端を発する「整合⁽⁴⁷⁾—不整合⁽⁴⁸⁾」₂に前後し跨り「再帰」(さまざまな2項パラドクス——「寛容のパラドクス⁽⁴⁹⁾」もしかり——上でのリカーション)する C_2 者は, C_1 者ほどに何処にでもはいなくなった (C_1 者が建造したダムの中に沈殿した) のか。これを [いつまでもなんとかなしに] 標準進化論で片付ければ, 2重様相性の複雑系モデルがいおうとする, 行為に影響する「集合論的包含関係上の「大小」/水平論を排除しきれない階層論的排除関係上の『上下/左右』」に起因するシステム的な現実主義からの, 「組織—システム」のプリミティブネス——「どちらが『より大きな構造』か」をいうにある「しかもしかも (FOL) —そもそも (SOL)」₂——へと発展開できなくなる。

システムの創発という果ては映画擬きな危惧に翻弄されずとも, 既述 (2) ④の4関係を単に FOL で考えるだけでは, 未来が不安になることはある。これに対しひとまずいえば, 「創発—還元」/「反 (内) 省—再帰」をいう社会科学においては, 「理由 (Reason) —原因 (Cause)」₂/「理論—実践」₂の限界状況の中で行う CC 者の「整合 (合理)」₂—不整合 (非合理)」₂といえる意思決定にかかわるから, 生物進化ゲーム論が7変項に浸透した ESS (進化安定戦略) や ALT 共生に対し, 発生論的共生 (非 ALT 共生) をどう考え進めるかが HI の CC 的志向性の試金石ともなるので, 第2節に跨っていく。これが, 「苦あれば楽あり 3.0」に値するかどうかは読者判断に委ねるが, 相互に未熟達だと言い合う既述の感染者には嫌悪感を抱くだけなドグマティストもいるだろう。しかしながら, マーケティングを含む7変項に CC 的志向性が足りないほど, 「SOL 的3層化のマネジメント」(7変項が3層各層にあるとしてのマネジメント上の応用の応用) は, 考え進まない。

- (5) C_1 的にアイデンティティを考え過ぎて自分を見失った者たちから, あるいは両岸 (C_1 の2項) を「剔抉」(その対称性を破ること) ——FOL か SOL かの誤読が生じやすいようなので, 以後は FOL に絞った語用だと断っておく——しようすることから, これからの歴史が大きく動くことはあるのか。発生論的共生とは, あらたな埋め立ての地 (場 [所]) へと, その両岸に起因しヘドロのように堆積した C_1 者 (コ隠れニヒリスト) たちと, [ダムが溢れる潮時から] 山からの土砂のように川底に堆積した C_2 者 (コ隠れユニバーサリスト) たちが, とともに「浚渫」された, 「更なる共重合体的な共生」である。浚渫は, 「共生は非相互的, 非対称的である」という逆説において批判されている duoming⁽⁵⁰⁾ も包摂する。ここには, ALT 共生論や第3項排除論などがあつたればこそだが, 図6-4において熟達化するほど最醇化——「2

(47) 整合化は以下の路線である。D. デイヴィッドソン/金杉武司ほか訳, 2007年。

(48) 不整合化を許容するのは以下の路線である。Q. メイヤスー/千葉雅也ほか訳, 2016年, 131頁。

(49) S. メンダス/谷本光男ほか訳, 1997 (1989)年, 27~32頁。

(50) G. ハーマン/上野俊哉訳, 2019年, 17~32頁。

重拘束／共重合」からの自由，更なる共重合への自由が「組織₂—システム₂」を越えていく——していく自由な「離合集散」（合従連衡）の「多化」が，閉殻するまでである。この閉殻は，この埋め立ての地の従前同様な内陸化（競覇馴化，前稿の謂いでは「領土化」）に対しては，「寛容—非寛容₂」における「非寛容₁」（内陸化を来す「寛容₁」ではない）を貫く「1化」——「もうひとつ化」とは別——を意味している。ここでいう寛容（非寛容）とは，主我（客我）の容量を越え他己（自己）を受容すること，すなわち，世界を自己（他己）の内部に包摂し同化しようとする私（あなた）の知の体系の全体性を突き破る無限として，他己（自己）を受容することである⁽⁵¹⁾。

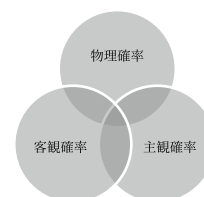
「個人／組織／社会」選択（契約）[論]がCC的な志向をするに一筋縄（デュアリズム→改良主義）でいかないのは，「ニヒリズム—ユニバーサリズム」が破れたかのような「オポチュニズム—ロイヤリズム」があったからだ。よって，現実を「天秤」にかけておいて「天の声にも時には変な声もある」と吐露する時に，その主観確率の外れは仕方ないが，衆目的になるほどその値打ちが問われるので，そこでの懺悔の無さは放棄されえない。ただし，目的の区分である「テレオノミー—テレオロジー」や同様区分が当てはまる目標の区分——身体予算が前面化する——に纏わる「前面—背面（捨象）化」には，いかなる外との関係があるかないかで「較差」が現実が生じている。よって，周知な合理性追求（究）上で国柄較差をいう論法⁽⁵²⁾すら容易に逆手にとれる（王様と奴隷の反転）ので，トランスベクション上の〔SDGSでもアジェンダ化される〕現実に対する「『倫理／指示計画的な規範₂—実践（実行）₂』での生兵法なちがいが，どうも対立を煽り炎上もする。これを質す目下の最有力が，批判的文化ベース論といえるネオ共進化論と発生論的共生論なのである。

第2節 競覇と非競覇：善と必然の間の制度実在性

欲求の対象でもある〔超〕組織個体の場〔所〕が，コレクティビズムはもとよりアセンブリッジそして発生論的共生とは似ても似つかないものであるとすれば，一体全体，誰彼のどんな「自由／不自由」を広げているのか。至る処にある言語起因のテキストやコンテキストのハイパー化から実在性を取り戻そうとして，人文科学と自然科学の限界で制度の実在性へと時限的にせよ向かう社会〔交変換〕の科学のために前節を請けて更に，少なくともつぎを考えながらいう。

第1には，社会科学が，主観確率，客観確率，そして物理確率という確率概念の和集合（∩積集合）のすべて（図6-3）を考えたとなると，「決定—主意論」についての両立論（東洋の過去の帳であった中観，西洋とは限らない中動態）と非両立論（古典説，源泉説，リバタリアニズム，懐疑論）⁽⁵³⁾がある冒頭で述べた行為3次元には，図6-4の示

図6-3 確率概念



(51) E. レビナス，2005（1961）年，73～84頁。2次化を内含すると考えられたので以上に基づく。

(52) Sen, A.K., 1992. A. セン・B. ウィリアムズ編著／後藤玲子監訳，2019年。

(53) J.K. キャンベル／高橋将平訳，2019年，87～122頁。以上を踏まえている。

す諸様相があることになる。ナッジ⁽⁵⁴⁾とは「リバタリアニズム₂—パターナリズム₂」をいうとすれば、これも両立論である。物理学が一致をみるならならば、同図のマルチバース論にかかわる「—」のセルについても、社会科学は言及する。同図中の人文的な「本質」は自然的な「物理」に置き換えていい。だからといえよう。意思を何かに還元しだす主知論は決定論に近づくが、主意論は非決定論を貫くということが、「科学—非科学」という対照と現代理性批判（「科学—非科学」₂の残余の追究）のはじまりであった。自然な決定論へと「ラプラスの悪魔」を手も無く追認し、同時に超社会での主意論（社会科学での「自由意思（主観）の帰属が帰責となるいわば悪魔」）の擁護化⁽⁵⁵⁾に影響された諸理論が後を絶たなかったのも仕方ない。そして、地表に降りた物理学といえども、両論が孕む「原因結果—理由成果」のパス・ファインダー未満である。

ではあるが、社会科学が追究してきた図6-4の網かけ部分—白抜き部分が確実性（「宿命」）—では、「確率性に曖昧性が浸潤した不確実性⁽⁵⁶⁾」（図6-3の積集合）もあり客観確率に対するグッド（バッド）ラックのような「運」がつきものだが、「積分（無限小な変化の無限回な累計化）的なスペク

図6-4 2重偶有性論以後

		絶対論		相対論
		本質的絶対	確率的相絶対	本質的相対
決定論	本質的必然 (スタビリティ)			—
	確率的偶必然 (メタスタビリティ)			
非決定論 (主意論)	本質的偶然 (コンティンジェンシー)	—		

トラム—微分（無限大な変化の無限回な小計化）的なソライティーズ」／「コンテクスト—ディグリー（程度）主義」を抑え込んでいく。程度には、頻度と傾性がある。本論では、現実に偏在する実在的対象を記述するとき、夙に言われてきたスペクトラムに加え、早い話がもう老眼なのかと思ひ始めた境界線はどこだったのかとソライティーズの方も同時前面化する。この方が、そうしてさえおけばよさそうに見えたスペクトラム化の一部にある暗在化——たとえば中間組織への埋め込みによる同盟型チャネル概念の洗練留保——も再考されやすくなることもある⁽⁵⁷⁾。

第2に、制度学派は行為の誘発資源となる「文化というカテゴリ」に着目し、新制度学派は条件反射的な行為へと矮小化はせずに「深い思考を介さない行為」に焦点を置いた。それらの一方で、文化資本論には、①客体化された文化資本、②制度化された文化資本、③身体化された文化資本（ハビトゥス、[遺伝子優位の]文化的行動）という形態的区分⁽⁵⁸⁾があった。そして、熟慮（熟議）⁽⁵⁹⁾しても意図せざる結果が生きた制度をつくる方とその制度を活かす方とでの2重不完全性によることに対しては、複製子（前稿図2）の束と

(54) Thaler, R.E. and C.R. Sunstein, 2008, pp. 5-6

(55) I. カント／篠田英雄訳, 1961~1962年。I. カント／波多野精一ほか訳, 1979年。以上の影響は大。

(56) Kamp, H., 1981, pp. 225-277.

(57) Hennart, J-F, 1993, pp. 529-547. 以上は、「拡張された中間 (the Swollen middle)」組織をいったが。

(58) P. ブルデュー／石井洋二郎訳, 1990 (1979)年, 259~343頁。D. スロスビーには後稿で言及する。

(59) C. Sunstein, 1999, pp. 5-31. 2007, pp. 1-14.

して制度を探究するうちに「制度とは均衡したルールだ」というときの FOL 的均衡概念を越える現代理性批判になる。第 2 制度論⁽⁶⁰⁾が 2 階でない共進化の SOL 場を孕む 2 次の制度論だとして、そこでいう実在（唯名的には既述のように言えるが実体はない「人為₂—自然₂」の法則／メカニズム）が、つぎの対照化の同時化により再考できる。①「遺伝子文化共進化の促進—制約」。ただし、遺伝子文化共進化は「人為₂—自然₂」における共進化であるから、それが実在であろうとも、人為的にメチル化（非メチル化する）するというフラジリティ（ロバストネス）が過去でも未来でも目につくことになる（図 6-4 の濃（薄）い網かけ部）。②その「非」メチル化の功罪の自戒にかかわるが、過去の「競覇—非競覇」における「エンカウンター（非競覇の出会い）—ディスカバリー（競覇の発見）」／「ストーリー—ナラティブ」。そして③「[非] 合理（『理論／実践』理性批判）₂—『思弁／経験（センス・データを認識にまでつくりあげる悟性）』₂」／「協力₂—非協力ゲーム₂」の取引論。ここでは、ゲーム論自体もそうになってきたが、自己実現可能性の開花と人格的必要の間で以下にも応じるエンゲージメントが前面化している。このエンゲージメントは、[再] 投資先とのかかわりでの議決権行使という意味で頻出していることも後稿では重要だが、意味的接続に向かう「事前／事後」の関係構築の前適応の意としていう。

これまで来た道から「存在—認識」／「弱い類的—強い個別的」の 4 区分にある依存、「『モノ—コト』の現実態（顕在）—可能態（潜在）」／「連続的な 1 つの組織内—不連続的な 2 つの組織間」⁽⁶¹⁾の 4 区分にある境界を、つぎから社会科学的に再考することも現代理性批判になるので、専門的にも大きい⁽⁶²⁾。①無には、存在論寄りの直接経験（言語非依存な脱人間中心化を誘導したユクスキュルの論法を包摂する「私もあなたもない」）にある「無」（思考者間には一切なにも確かに存在しないという意）と、認識論寄りの純粹経験（言語を通過するが言語決定を越えた自我他我・主客の一致）にある「無」（思考はその極点において可知的なものの表象行為に媒介されないという意）がある。つぎの 2 関係の前者がなにもないオープンなものは原理的には境界をもたないので接触は語りえない。構成的なのか破壊的なのか腹を割る関係上での接触では、有が実体化する。これとは別に、脱構成的可能態がさらけ出して見せる力によって発生する関係上での接触では、無が実体化する。②有が実体化する接触（前稿既述の対比がいう「相関」上での接触）と無が実体化する接触（同対比上でまさしくいわれている「接触」）のテクスチャー（いずれが横糸か縦糸かで肌触りが変わる織りなし）が問われ始めている。そして③存在と現存在の関係を思考可能にするために考案されてきた「商品でも業態でもしかりな」態様論では、態様（モード）はその組成からして副詞的な性質を有しており、存在と現存在は「なんであるか」ではなく「どのような（になる）[べき]か」をむしろ表現している。さても、相関主義における関係主義が、あらゆる実在が人間と世界の関係に基礎づけられることを否定しながらも、私の状況に変化する理由がないにもかかわらず、どんなものも他の事物に対して何らかの影響をもたない限り実在的ではないとしてきたこと⁽⁶³⁾が、態様

(60) G.M. ホジソン／八木紀一郎ほか訳、1997（1988）年、。C. ヘルマン＝ピラート・I. ボルディレフ／岡本裕一朗・瀧澤弘樹訳、2017（2014）年。

(61) 加地大介、2008 年、107～178 頁。以上に基づく。

(62) G. アガンベン／上村忠男訳、2016（2014）年、393～464 頁、439～464 頁。以上も踏まえている。

(コモード) 及んではイデオロギーからの手離れを加速させることになるのだろうか。

そして第3に、前稿の図5で同定した中心的意味での「必然」には、実は複雑な意味があるといわれていた。これも明らかに包摂論に属すと見做したが、そこでは、必然(コ必要)を諸論から整序してつぎの4つに区分し、つぎの②は①の裏返しであり、③は①の部分であり、①と④が両極であるとされた⁽⁶⁴⁾。①「すべてAはBである」というような全称肯定(否定)命題の形でいわれることがらが、これと矛盾する「AがBでないこともある」というような特称否定(肯定)命題の否定を通じて自己自身を確かめるとき、②このうち「すべてAはBである」という全称肯定命題が「AならばBである」という条件文の形で考えられ、この仮言命題が更にまた「AがあればBがある」の意味に取られて、これを逆否定で「BがなければAはない」というとき、③特称肯定(否定)命題も、必然性をもった全称肯定(否定)命題で言われていることがらを部分的に言っている限りにおいて、すなわちそれと反対の特称否定(肯定)を許容する意味のものではない限りにおいては従属的に、④「AはBであることもあるし、Bでないこともある」という形で特称肯定命題と特称否定命題の両立が可能である場合に、特定のAがBであったりBでなかったりしていること。

その上で、人間の自由は善と必然の間に成り立つとして探求し、日常現象としてもあるダブル・バインドを打開するために問題となって現れてくる「BであることもできればBでないことも可能なAが、現にBである」という場合の意味での必然性という問いに答えることが、ライプニッツ⁽⁶⁵⁾が応じようとした十分な理由の原理になるとした。必然(彷徨える原因)を無限の連鎖のうちに追いかけるのではなく、無限遡行の困難性がなく価値の区別だけがある善の下に必然を従える工夫から、技術も文化も始まったのだという。だからといい、必然を善に置き換えるだけな決定論にならないのは、善は何もかもがすっかり決定されてしまっているわけではなく、その実現にはテンション関係が付き纏うからだという。そして、価値の下に、現存在そのものではなく現存在を超越している存在理由を考えるのが恐らく最も無理の少ない考え方(根拠)になるのではないかという。として、価値のないところに自由はなく、バーリン流にいい換えれば「必然からの自由」と「善への自由」をいうわけである。ベンサム⁽⁶⁶⁾に辿られる限界革命は「ベネフィット/コスト」という価値のパラドクスへの自己責任を果たしたが、それだけが価値の区別であるわけではないのは言うまでもない。後稿で述べるロールズの正義論に先行する時代に、その善の解釈には既にミクロとマクロのリンクがあり、ネオ共進化論的に考えれば変わるような人間の価値観が先取りされていた。

- (6) むろん途上ではあるが以上から、すべての依存は「必要はすべて善に依存する」というときの依存であり、つぎにすべての境界は「そのようにいうときの必要と善

(63) G. ハーマン/山下智弘ほか訳、2017年、25頁。

(64) 田中美知太郎、1952年、75~183頁。

(65) G.W. ライプニッツ/河野与一訳、1950年。

(66) J. ベンサム/山下重一訳、1979年、69~210頁。政治文脈でいうことが多い「功利」と経済文脈でいうことが多い「効用」は、以上にある“utility”の訳出上の破れであり、機能的相互包摂がある。

のうちに境界がある」というときの境界であると、つぎから考える。出来るだけ多くのことを考えるというときでも、「7 変項」における比較級として1(多)なる多(1)といえるイシューの優先順位は取引上で高く、紛れもなく非線形な複雑系世界における「組織₂—システム₂」の境界は複数なのである⁽⁶⁷⁾。①上記の「善」とは、人文科学では「原因—それなしには原因が原因として働き得ないところのもの」の区別が厳に為されるときの後者だとされてきた⁽⁶⁸⁾。②上記の「必要」とは、自然科学では「古典—量子的」交換関係における論争の核心問題の新しい形として確率論的理論が考えられてきたこと⁽⁶⁹⁾のうちで、マテリアリズムを越えるモノの原理を「はじめ(以前)—おわり(以後)」に求める立場のDCになっている。

善なしでも必要なしでも済ますことのできる学問分野があるにはある⁽⁷⁰⁾という。が、ウェバー(ヴェーバー)がいった「価値自由」について揺らぐ解釈として「価値離脱—反離脱」／「完全—不完全」がある科学的クリティシズムの活路を、永遠真理の絶対的必然性と事実真理の条件的必然性の区別は正しいので、3層化のどこにでもある方が悪魔ではない「7 ± 2」のバイナリ・コードのSLMS化の実装による応用や応用の応用を、現実の探求からまずは考えられる。それらの中でも重視するのが、競覇と非競覇である。ALTは、競覇からの産物概念であった。むろん、「競覇—非競覇」は、主義としては一旦後景化する期間があるが相補(「対立コード」ではなく「対照コード」)的な原理である。

- (7) その全体の経験化における確率化を促すFOLからいわれてきたのが相対矛盾であり、その全体の経験化における確率化を促さないSOL—脳が忘れても遺伝子は忘れない—からいわれてきたのが絶対矛盾である。相対矛盾ばかりからの「1」—競争変項数を増やす際に実は背面化された還元操作がある—に向かう「競覇原理」や、絶対矛盾からの〈1〉—競争変項数を減らす際に実に前面化している創発がある—をいう「非競覇原理」に居心地が悪い者は、ニッチ構築に向かうか餌撒きに徹するだろう。よって、相互牽制し合うズレから捻じれた重合すなわち螺旋の理路が崩れ、百足に靴を履かせるようにする—一神教依存とも逆の多神教依存ともさながら同型な「統治₂—自治₂」のなさが、「CC者ではない2階者の不自由の不全」を招いてきたという点では、「歴史は繰り返す」といわれた通りであった。

正しい分配(distribution)の在り方としての正義と現実主義については、感情的現実主義、追加的利益や費用が発生しても結果が同じであればその結果が生じる過程が判断に影響しないといった限定された帰結主義以後を、後稿に言及する。が、いまは「再帰性の近代」をつぎのように眺める。ただし、物議を醸した3人⁽⁷¹⁾のいずれとも、狭義言語能

(67) Meadows, D., 2008. 以上でもいう。

(68) アリストテレス／高田三郎訳, 1971年。1973年。以上以来だといわれている。

(69) I. プリゴジン／小出昭一郎・安孫子誠也訳, 1984(1984)年。

(70) Hartley, D., 2010. L. ドイヨル・I. ゴフ／馬場裕・山森亮監訳／遠藤環・神島裕子訳, 2014(1991)年。以上は古典理論の延長上にあるが一見を要する。

力のなせる業が⁽⁷²⁾、本論の再帰性概念は一致していない。

- (8) FOL上で多用される3段論法とはいえこれに縛られただけでは小前提に特称命題があると帰結が乱れ、これが論理上のことでも経験上の3層化に連なるほど切り取っているといわれることで、傾向的に高階型化する。その縛りを超えてSOL化した3層化は、それ以上でもそれ以下でもない層化である。また、「非実体—実体」／「非実在—実在」／「対自—即自⁽⁷³⁾」について、「相関—非相関（接触）」／「アトミズム—ホーリズム」の対称性を原基とする「人文—自然 [科学]₂」におけるCCは、社会 [科学]の破れを脱人間中心的にテクスチャライズする。そして、「テキスト—コンテクスト」のハイパー化相互作用における闇雲な蜘蛛の子の認識に対して、「コネクショニズム（コ認識論の工学化）—シンボリズム」／「人間らしき迷いを縮減する機能主義がいう機能—そういう機能分化の基にある系統樹発想を越えた [ネオ]共進化（発生論的共生）」という思考の中間表象を巡りつづけ、知は「制度や管理の実在性（意味／意義／事実真理）」を探求する。

「競覇（ストーリー化しやすかった相対矛盾ベース）—非競覇（ナラティブ化しやすかった絶対矛盾ベース）」が「ソフト—ハードランディング₂」／「維新—革命₂」をいう世界の拡大として問題化してきたといえるので、それらを改めて以下のように準えておこう。「政府関係家—資本関係家」／「税金化再分配—非税金化再投資」／「観察できなければ不可知者である観察者—観察できなくとも可知者である被観察者」のいずれも、「市場—多様性原理₂」のC₁とC₂だけの守護神ではなくなる。また、[金利ゼロ以下化により]個人投資も漁り運用する申し子と、それらのすべてを吸い上げていくように過度な株価（コ株主主権）重視の企業価値評価を下す申し子には、渡りに船の蜜月が雨後の筍のようにあった。その2様の申し子たちは、企業破綻（倒産）後に残留する同上的な企業価値の再生（リスタート）において、一役買うには長けてきた。よって、企業の共時態的組織個体が、株価維持（株主ポピュリズム）のために内部留保を増進したのだとすれば、それは再投資の冷え込みにつながり、ビジネスモデル化で引けを取ったかのようだ。典型的には情動犯罪の減刑や尊属殺人の増刑の根拠になっている「外側—内側」／「原因—理由」における傾斜が、そのコツを掴んだ彼らの然り顔にある「ありえなさ」を招来してきた。ディープな金融資本主義における呉越同舟か同床異夢かが問われる申し子や落し子たちも、あらたなアントレプレナーたちも、2重螺旋仮説の包披論から絡み合う2本の道筋が架橋となりルビコン川を渡るといえるときには、資本主義の分裂病理を越えることだ。このことが、われわれは主要な移行（CC）を成し遂げるために必要なあらゆる条件を満たし始めているという推論上の根拠になる。

(71) U. ベック・A. ギデンス・S. ラッシュュ／松尾精文ほか訳、1997年。

(72) 岡ノ谷一夫、2004年、896～897頁。

(73) J. サルトル／松浪信三郎訳、2008（1943）年。465～491頁。カント流とサルトル流があるので以上を参看されたい。

- (9) 「 C_1 上のFOL的階型— C_2 上のSOL的ループ化」／「AI—HI化」において、つぎを踏まえていう⁽⁷⁴⁾。① C_2 を無理に C_1 での2項対立にしても返って矛盾が生じる場合がある。② C_1 での2項対立の一方だけを選んだつもりではいても、いつの間にか C_2 の混入した現実が少なくない。③時代時代で奏効した産業を除けば、 C_1 での当て馬的な産業振興や C_2 での総花化する介入への非難は大方で妥当するという見方が多い。④知の探求は、「コンフリクト—オーダー」／「主観—客観」⁽⁷⁵⁾への「非馴化—馴化」／「愚者—賢者」(図6-5)、そして「オーダーは人間が『内₁—外₁』で考えた人間の『内部／外部』に敵対しているという観念凝固⁽⁷⁶⁾がある競覇—オーダーは人間が『内₂—外₂』で考えるとそうといえるばかりではないという観念融解がある非競覇」という思考の中間表象を巡る。そして⑤「統一—分化」／「統治—自治」にある「SD[Gs]／[C]SR/ESG/CSV」では、「プロ—アマ」／「正規—非正規」／「頸木内労働観—頸木を離れた労働観」をHI的にトランスペクシオン化する標準制度論以後や標準管理論以後がある。

図6-5 モデルと盲点

	A	反A
A	A的賢者	A的愚者
反A	反A的賢者	反A的愚者

「モノ₂—サービス₂」／「手許₂—手前₂」から一人では何もできないからトランスペクシオンがあると認識できたとき、「これがここに本当にあるんだ⁽⁷⁷⁾」というように、「組織—システム」に隠れている「ソーティング⁽⁷⁸⁾」の实在感が「リアル—バーチャル(拡張現実)」に変わる。こうして、専門的にはマーケティング・チャンネル上でいうつぎつぎに新しいものからの「オムニ」(ご多聞に漏れず何でもありなこと)に対する批判が、「オート(自給)・ポイエーシス(自足)」であった、として社会科学的には受け止めてもいい様相がある。というのは、4区分{FOL(1なる1, 多なる多), SOL(1なる多, 多なる1)}におけるCC—焦点化を経るために2次化Ⅲまでがある中で、「人文—自然科学」₂を考える社会科学の諸専門の姿としての「 C_1 から(へ)— C_2 へ(から)」₂の「そして」——へと最醇化しない限り、「ハリネズミ⁽⁷⁹⁾」の異解論法を振り翳す同じ穴の貉(高階型化)になるからである。その上でつぎのようにして、上述の「善」(必然引く必要にある最高善⁽⁸⁰⁾未満)を決めていく。①「エンゲージメント—コミットメント」／「セルフ—非セルフ」／「エンパワーメント—ディス・エンパワーメント」にある経験からもの歴史の刷新。②自然科学寄りな「相即—非相即」／人文科学寄りな「寛容—非寛容」があって取引するか否かにお

(74) I. パーリン／河合秀和訳, 1997(1953)年。①については「 I_2 —多₂」に向かったと考える以上から、②と③については以下からいう。J. ティロール／村井章子訳, 2018(2016)年, 391~416頁。

(75) 猿渡敏公, 2016年, 162~172頁。以上に詳しい。

(76) S. モスコヴィッチ／古田幸男訳, 1983(1974)年, 20頁。以上をSOLから言い換えている。

(77) T. トウエイツ／村井理子訳, 2015(2011)年。実験考古学(たとえば大昔の宮殿や城の再現)よりは時間長が卑短だが、この方が実感を得やすいならば格好の書である。

(78) 渡辺慧, 1978年。

(79) I. パーリン／河合秀和訳, 1997(1953)年, 岩波書店。以上でいう「ハリネズミ」のこと。

(80) B. de スピノザ／畠中尚志訳, 1951年。人間が自己自身および自己の活動能力を観想することから生まれる喜び。

いて緊迫する自由度（非自由）の拡大（縮小）の溶解である妥協の程度選択。そして③公共的正当化の基準を考える基底としての「善—[正]義（自由を独断と支配欲から解放し自由に道徳的正当性を付与する）」。

おわりに

「1元（同一）—多元（差異）」／「創発—還元」というパラドクスの顛末に対し存在態様を巡る応答をいかにしえるかは、「以前と以後」を貫く「幹（ステム）存在」のアブダクションにかかっている。物理学が「ビック・バン以前と以後」——以後としての存在は「物質—エネルギー—情報」に3態様化されてはきた——をいえば、哲学が「人類以前と以後」を、社会科学が「標準制度（管理）以前と以後」をいうことに対しては、諸学間で伝わりきらないことがあるにせよ、生物学での動物についての大発見は前稿以後の射程内での照準化にとっても有意義であった。この発見が1だ、いやそんな筈はないといえば、いずれもがやはり幻想だとされていくのか。この点で、包披（「認識論₂—存在論₂」／「ホーリズム₂—アトミズム₂」）といった相互包摂論はより頑強であり、組織論的にも濃淡含みな分厚い記述をより可能化する。ついでいえば、CCへとうこうしたアブダクションを成そうとするマーケティング論を「幹マーケティング論」と呼んでいきたくなるほどである。

引用参考文献

- Alderson, W., 1978 (1957), *Marketing Behavior and Executive Action: A Functionalist Approach to Marketing Theory*, Arno Press.
- Argyris, C., 1999, *On Organizational Learning*, 2nd ed., Blackwell Publishing.
- APR, R. and B. Smith, A.D. Spear, 2015, *Building Ontologies with Basic Formal Ontology*, The MIT Press.
- Barrett, F.L., 2018 (2017), *How Emotion Are Made: The Secret Life of The Brain*, Pan Books (Macmillan).
- Bhaskar, R., 2008 (1975), *A Realist Theory of Science*, Verso (Leeds Books).
- Bhaskar, R., 2015 (1979), *The Possibility of Naturakism: A Philosophical Critique of The Contemporary Human Sciences*, 4th ed., Routledge. (R. バスカー／式部信訳, 2006 (1998) 年, 『自然主義の可能性：現代社会科学批判』, 第3版, 晃洋書房)
- Bhaskar, R., 2011, *Reclaiming Reality: A Critical Introduction to Contemporary Philosophy*, Routledge.
- Bowles, S., 2008, "Policies designed for self-interested citizens may undermine the moral sentiments: Evidence from economic experiments," *Science*, 320 (5883), pp. 1605-1609.
- Chakravartty, A., 2007, *A Metaphysics for Scientific Realism*, Cambridge University Press.
- Dawkins, R., 1982, *The Extended Phenotype: The long Reach of the Gene*, Oxford University Press. (R. ドーキンス／日高敏隆ほか訳, 1987年, 『延長された表現型：自然淘汰の単位としての遺伝子』, 紀伊國屋書店)
- Dretske, F., 1988, *Explaining Behavior: Reasons in a World of Causes*. Massachusetts

- Institute of Technology. (F. ドレツキ／水本正晴訳, 2005年, 『行動を説明する：因果の世界における理由』, 勁草書房)
- Finley, M.I., 1973. *The Ancient Economy*, University of California Press.
- Ford, J.D. and R.W. Backoff, 1988, "Organizational Change In and Out of Dualities and Paradox," in Quinn, R.E. and K.S. Cameron, eds., 1988, *Paradox and Transformation: Toward a Theory of Change in Organization and Management*, Ballinger Publishing, pp. 81-121.
- Giere, R.D., 2006, *Scientific Perspectivism*, The University of Chicago Press.
- Grant, K., 1997, *Fuzzy Management: Contemporary Ideas and Practices at Work*, Oxford University Press.
- Guala, F., 2016, *Understanding Institutions: The Science and Philosophy of Living Together*, Princeton University Press. (F. グァラ／瀧澤宏和監訳, 2018年, 『制度とは何か：社会科学のための制度論』, 慶應義塾大学出版会)
- Hartley, D., 2010, *Understanding Human Need: Social Issues, Policy and Practice*, The Policy Press. (D. ハートレー／福土正博訳, 2012年, 『ニーズとは何か』, 日本経済評論社)
- Hennart, J-F, 1993, "Explaining the Swollen Middle: Why Most Transactions Are a Mix of 'Market' and 'Hierarchy'," *Organization Science*, 4(4), pp. 529-547.
- Henrich, J., 2016, *The Secret of Our Success*, Princeton University Press. (J. ヘンリック／今西康子訳, 2019年, 『文化がヒトを進化させた：人類の反映と〈文化—遺伝子革命〉』, 白揚社)
- Hunt, S.D., 2000, *A General Theory of Competition: resources, Competences, Productivity, Economic Growth*, Sage.
- Juarrero, A., 2002, *Dynamics in Action: Intentional Behavior as a Complex System*, The MIT Press.
- Kahneman, D., 2003, "Maps of bounded rationality: psychology for behavioral economics," *American Economic Review*, 93(5), pp. 1449-75.
- Kamp, H., 1981, "The Paradox of the Heap," in Uwe Monnich, ed., *Aspects of philosophical Logic: Some Logical Forays into Central Notions of Linguistics and Philosophy*, pp. 225-277.
- Keefe R., and P. Smith, eds., *Vagueness: A Reader*, 1997, A Bradford Book.
- Lewis, K., 2003, "Measuring Transactive Memory Systems in the Field: Scale Development and Validation," *Journal of Applied Psychology*, 88(4), pp. 587-604.
- Meadows, D.H., 2008, *Thinking in Systems: A Primer*, Chelsea Green Publishing. (D.H. メドウズ／小田理一郎訳, 2015年, 英治出版)
- Moore, M.L., and D. Riddel D. Vocisano, 2015, "Scaling Out, Scaling Up, Scaling Deep: Strategies of Nonprofits in Advancing Systemic Social Innovation," *Journal of Corporate Citizenship*, 58, pp. 67-84.
- Myers, D.G., 2013, *Psychology*, 7th ed., Worth Publishers.
- Redding, J.C. and R.F. Catalanello, 1994, *Strategic Readiness*, Jossey-Bass.
- Sen, A.K., *Inequality Reexamined*, 1992, Russell Sage Foundation. (A. セン／池本幸生ほ

- か訳, 1999年, 『不平等の再検討: 潜在能力と自由』, 岩波書店)
- Simon, H.A., 1983, *Reason in Human Affairs*, Stanford University Press. (H.A. サイモン / 佐々木恒男・吉原正彦訳, 2015 (1987)年, 『意思決定と合理性』, 筑摩書房 (文眞堂))
- Sperber, D., 1996, *Explaining Culture: A Naturalistic Approach*, Blackwell Publishing.
- Sunstein, C.R. and Edna Ullmann-Margaret, 1999, "Second-order Decisions", *Ethics*, 110, pp. 5-31. (C. サンスティーン / 那須耕介編・監訳, 2012 (1988-2008)年, 『熟議が壊れるとき: 民主制と憲法解釈の統治理論』, 勁草書房。)
- Sunstein, C.R., 2007, "Second-order Perfectionism," *Fordham Law Review*, 75, pp. 1-14. (C. サンスティーン / 那須耕介編・監訳, 2012 (1988-2008)年, 『熟議が壊れるとき: 民主制と憲法解釈の統治理論』, 勁草書房。)
- Thaler, R.E. and C.R. Sunstein, 2008, *Nudge: Improving Decisions about Health, Wealth, and Happiness*, Penguin Books (Yale University Press). (R. セイラー・C. サンスティーン / 遠藤真美訳, 2009年, 『実践行動経済学: 健康, 富, 幸福への聡明な選択』, 日経BP社。)
- Weich, K.E. 1979, *The Social Psychology of Organizing*, 2nd ed., Random House USA. (K. E. ワイク / 遠田雄志訳, 1997年, 『組織化の社会心理学』, 文眞堂。)
- アリストテレス / 高田三郎訳, 1971, 1973年, 『ニコマコス倫理学 (上・下)』, 岩波書店。
- A.N. ホワイトヘッド・B. ラッセル / 岡本賢吾ほか訳, 1988年, 『プリンキピア・マテマティカ序論』, 哲学書房。
- A. セン・B. ウィリアムズ編著 / 後藤玲子監訳, 2019年, 『功利主義をのりこえて』, ミネルヴァ書房。
- B. ラッセル / 高村夏輝訳, 2007年, 『論理的原子論の哲学』, 筑摩書房。
- B. de スピノザ / 畠中尚志訳, 1951年, 『エチカ (上下)』, 岩波書店。
- C. ヘルマン=ピラート・I. ボルディレフ / 岡本裕一朗・瀧澤弘樹訳, 2017年, 『現代経済学のヘーゲルの転回』, NTT出版。
- C.M. ビショップ / 元田浩ほか訳, 2012年, 『パターン認識と機械学習 (上下): バイズ理論による統計的予測』, 丸善出版。
- C.S. パース著 / C. ハートショルン, P. バイス編 / 米盛裕二編訳, 1985年, 『現象学』, 勁草書房。
- D. スロスビー / 中谷武雄・後藤和子監訳, 2002 (2001)年, 『文化経済学入門: 創造性の探求から都市再生まで』日本経済新聞社。
- D. デイヴィッドソン / 服部裕幸・柴田正良訳, 1990 (1980), 『行為と出来事』, 勁草書房。
- D. ルイス / 出口康夫監訳, 2016 (1986)年, 『世界の複数性について』, 名古屋大学出版会。
- D.R. ホフスタッター / 片桐恭弘ほか訳, 2018 (2007)年, 『わたしは不思議の環』, 白揚社。
- D.J. コリス・C.A. モンゴメリー / 根来龍之ほか訳, 2004 (1998)年, 『資源ベースの経営戦略』, 東洋経済新報社。
- E. レビナス / 熊野純彦訳, 2005 (1961)年, 『全体性と無限 (上)』, 岩波書店。
- F.A. ハイエク / 中山智香子ほか訳, 2009年, 『思想史論集』, 春秋社。
- F. ダーウィン / 浜中浜太郎訳, 1931年, 『人および動物についての表情について』, 岩波書店。

- G. アガンベン／上村忠男訳, 2016 (2014) 年, 『身体の使用：脱構成的可能態の理論のために』, みすず書房。
- G. アガンベン／上村忠男訳, 2018 (2016) 年, 『実在とは何か：マヨラナの失踪』, 講談社。
- G. ドゥルーズ・F. ガタリ／市倉宏祐訳, 1986 年, 『アンチ・オイディプス：資本主義と分裂病』, 河出書房新社。
- G. シモンドン／藤井千佳世監訳・近藤和敬ほか訳, 2018 年, 『個体化の哲学』, 法政大学出版会。
- G. ハーマン／山下智弘ほか訳, 2017 年, 『四方対象：オブジェクト指向存在論入門』, 人文書院。
- G. ハーマン／上野俊哉訳, 2019 (2016) 年, 『非唯物論：オブジェクトと社会理論』, 河出書房新社。
- G. ベイトソン／佐藤良明訳, 2000 年, 『精神の生態学』, 新思索社。
- G.H. ミード／船津衛・徳川直人編訳, 1991 年, 『社会的自我』, 恒星社厚生閣。
- G. モンクほか編／国重浩一・バーナード紫訳, 2008 年, 『ナラティヴ・アプローチの理論から実践まで』, 北大路書房。
- G.M. ホジソン／八木紀一郎ほか訳, 1997 年, 『現代制度派経済学宣言』, 名古屋大学出版会。
- G.W. ライブニッツ／河野与一訳, 1950 年, 『モノドロジー 形而上学叙説』, 岩波書店。
- H.A. サイモン／二村敏子ほか訳, 2009 (1997, 1994) 年, 『新版 経営行動』, ダイアモンド社。
- I. カント／篠田英雄訳, 1961 年, 1962 年, 『純粹理性批判 (上中下)』, 岩波書店。
- I. カント／波多野精一ほか訳, 1979 年, 『実践理性批判』, 岩波書店。
- I. ハッキング／出口康夫・久米暁訳, 2006 年, 『何が社会的に構成されるのか』, 岩波書店。
- I. ヒル編著／岡本幸治訳慣習, 1983 年, 『経済的自由と倫理』, 創元社。
- I. バーリン／河合秀和訳, 1997 (1953) 年, 『ハリネズミと狐』, 岩波書店。
- I. ブリゴジン／小出昭一郎・安孫子誠也訳, 1984 (1984) 年, 『存在から発展へ』, みすず書房。
- J. サルトル／松浪信三郎訳, 2008 年, 『存在と無：現象学的存在論の試み Ⅲ』, 筑摩書房。
- J. デリダ／丸山圭三郎訳, 1984 年, 「〈解体構築〉DÉCONSTRUCTION とは何か」, 井筒俊彦, 2019 年, 『意味の深みへ：東洋哲学の水位』, 339～360 頁。
- J. デリダ・J.D. カプート編／高橋透ほか訳, 2004 (1997) 年, 『デリダとの対話：脱構築入門』, 不正大学出版局。
- J. バトラー／佐藤嘉幸・清水知子訳, 2018 (2015) 年, 『アセンブリ』, 青土社。
- J. ベンサム／山下重一訳, 1979 年, 「道徳および立法の諸原理序説」, 関嘉彦責任編集『ベンサム J. S. ミル』, 中央公論新社。
- J. モノー著, 渡辺格・村上光彦訳, 1972 年, 『偶然と必然』, みすず書房。
- J.K. キャンベル／高橋将平訳, 2019 年『自由意志』, 岩波書店。
- K. ゲーデル／林晋・八杉満利子訳 (解説), 2006 年, 『完全性定理』, 岩波書店。
- K. マルクス／城家登・田中吉六訳, 1964 年, 『経済学・哲学草稿』, 岩波書店。
- L. ウイトゲンシュタイン／野矢茂樹訳, 2003 年, 『論理哲学論考』, 岩波書店。
- L. ドイヨル・I. ゴフ／馬場裕・山森亮監訳／遠藤環・神島裕子訳, 2014 (1991) 年, 『必

要の理論』, 勁草書房。

- L. ボルトロツティ／鴻浩介訳, 2019年, 『非合理性』, 岩波書店。
- M. カオンゾ／高橋昌一郎監訳, 2019年, 『PARADOX MARGARET CUONZO パラドックス』, ニュートンプレス。
- M. ストラザーン／高杉高司ほか訳, 2015(2004)年, 『部分的つながり』, 水声社。
- M. ミンスキー／安西祐一郎訳, 1990年, 『心の社会』, 産業図書。
- M.A. ルッツ／馬場真光訳, 2017(1999)年, 『共通善の経済学』, 晃洋書房。
- M.D. ハウザー・N. チョムスキー・W.T. フィッチ／長谷川太丞訳, 2004年, 「言語能力：それは何か、誰が持つのか、どう進化したのか?」『科学』, 74(7), 871～877頁。
- N. キャリー／中山潤一訳, 2015(2015)年, 『エピジェネティクス革命：世代を超える遺伝子の記憶』, 丸善出版。
- N. チョムスキー／福井直樹・辻子美保子訳, 2011年, 『生文法の企て』, 岩波書店。
- P. ブルデュー／石井洋二郎訳, 1990(1979)年a, 『ディスタンクシオン I』, 259～343頁。
- Q. メイヤスー／千葉雅也ほか訳, 2016年, 『有限性の後で：偶然性の必然性についての試論』, 人文書院。
- R. ブランダム／斎藤浩文訳, 2016(2000)年, 『推論主義序説』, 春秋社。
- R. ローティ／野家啓一監訳・伊藤春樹ほか訳, 1993年, 『哲学と自然の鏡』, 産業図書。
- S. ジョージ／小南祐一郎・谷口真理子訳, 1984(1977)年, 『なぜ世界の半分が飢えるのか：食糧危機の構造』, 朝日新聞社。
- S. メンダス／谷本光男ほか訳, 1997(1989)年, 『寛容と自由主義の限界』, ナカニシヤ出版。
- S. モスコヴィッチ／古田幸男訳, 1983(1974)年, 『飼いならされた人間と野性的人間』, 法政大学出版局。
- S.A. クリプキ／八木沢敬・野家啓一訳, 1985年, 『名指しと必然性』, 産業図書。
- S.F. ギルバート・D. イーベル／正木進三ほか訳, 2012年, 『生態進化発生学：エコーエボージェネティクスの夜明け』, 東海大学出版会。
- T. トウエイツ／村井理子訳, 2015(2011)年, 『ゼロからトースターを作ってみた結果』, 新潮社。
- U. ベック・A. ギデンス・S. ラッシュ／松尾精文ほか訳, 1997年, 『再帰的近代化：近現代における政治, 伝統, 美的原理』, 而立書房。
- W.V.O. クワイン／飯田隆訳, 1992年, 『論理的観点から：論理と哲学をめぐる九章』, 勁草書房。
- 浅田彰, 1985年, 『ダブル・バインドを超えて』, 南想社。
- 甘利俊一, 2008(1989)年, 『神経回路網とコネクショニズム』, 東京大学出版会。
- 大津由紀雄, 2004年, 「言語機能起源論：考えるヒント」『科学』, 74(7), 820～821頁。
- 岡ノ谷一夫, 2004年, 「創発と再帰」, 『科学』, 74(7), 896～897頁。
- 河本英夫, 2000年, 『オートポイエーシス 2001』, 新曜社。
- 一ノ瀬正樹, 2006年, 『原因と理由の迷宮：「なぜならば」の哲学』, 勁草書房。
- 加地大介, 2008年, 『穴と境界：存在論的探究』, 春秋社。
- 加地大介, 2018年, 『もの：現代的実体主義の存在論』, 春秋社。

- 木嶋恭一，2005年，『交渉システム学入門』，丸善。
- 金子邦彦，2019年，『普遍生物学：物質に宿る生命，生命の紡ぐ物理』，東京大学出版会。
- 金子洋之，2006年，『ダメットにたどりつくまで：反实在論とは何か』，勁草書房。
- 斎藤環，2001年，『文脈病』，青土社。
- 猿渡敏公，2016年，「批判的マーケティング論の類型と今後の課題」，福田邦夫編著『21世紀の経済と社会』，西田書店，153～180頁。
- 澤口俊之，2004年，「操作系の起源としての言語の起源」『科学』，74(7)，822～824頁。
- 鈴木生郎ほか，2014年，『現代形而上学』，新曜社。
- 竹田青嗣，2001年，『言語的思考へ』，径書房。
- 田中美知太郎，1952年，『善と必然との間に』，岩波書店。
- 中島平三，2004年，「言語として何が創発したか」『科学』，74(7)，858～860頁。
- 野中郁次郎・山口一郎，2019年，『直観の経営学：「共感の哲学」で読み解く動態経営論』，KADOKAWA。
- 日本交渉学会編，2003年，『交渉ハンドブック』，東洋経済。
- 長谷川博，2019年，「社会交変換論Ⅵ：取引原論へ〈未完〉を考え進めて」，『千葉商大論叢』，57(2)，23～51頁。
- 細谷暁夫，2019年，「現代物理学における『いま』，「あとがき」，森田邦久編著，『〈現在〉という謎：時間の空間化批判』，勁草書房。
- 山岸俊男，2002年，『心でっかちな日本人：集団主義文化という幻想』，日本経済新聞社。
- 吉本隆明，1968年，『共同幻想論』，河出書房新社。
- 渡辺慧，1978年，『認識とパタン』，岩波書店。

(2020.1.22 受稿，2020.3.17 受理)